



宇田川榕菴著『舎密開宗』

資料登録番号
2013-19

日本人の手による初の化学の教科書「せいみかいそう」です。江戸時代の蘭学者宇田川榕菴(1798-1846)が、当時手に入った20数種のオランダの化学書を読破し、10年かけて編集した大作です。オランダ語で化学を意味する語chemieの音訳として榕菴が「舎密」の字を充てました。「酸素」「水素」「窒素」「還元」「試薬」といった、現在も使われる基本的な化学用語の多くが、榕菴によってこのとき発明された訳語です。『舎密開宗』は明治以降も販売され、日本において化学を学ぶものにとっての拠りどころとなりました。

Chemieの訳語としては、音訳である舎密のほか、意識として「離合」「分合」「製煉」などの案もあったそうです。分離・合成による学問という意味が伝わります。現代のわたしたちが用いる「化学」という訳語は、もともと1850年代前半に中国で生まれたものです。それが1850年代末には日本に伝わり、わずか10年ほどで「舎密」から「化学」に取ってかわることとなりました。これは、江戸幕府の洋学研究機関である開成所の化学担当局が、1865年に「化学」の名称を採用したことによります。1869年に大阪の地につくられた日本初の近代化学の学校「舎密局」においても、すでに「舎密」ではなく「化学」の方が一般的な語だったようです。

【参考文献】

『化学史への招待』化学史学会編、2019年、オーム社

上羽 貴大(科学館学芸員)

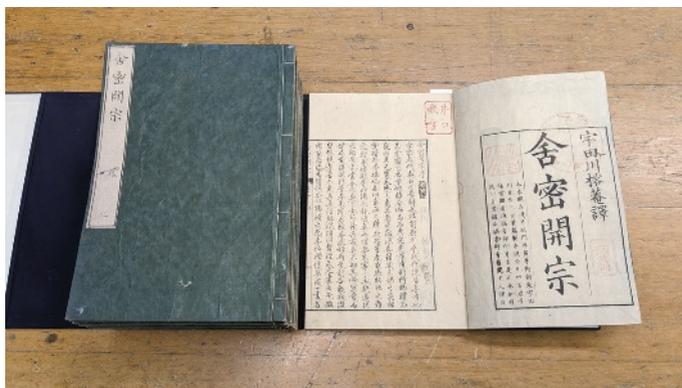


写真. 舎密開宗。右は第一巻巻頭